

事実在即した、開かれた情報は何が起きているかを知らせ、それを踏まえて、今後どうあるべきかの指針を与えてくれる。正確な情報が歴史を正してくれるのである。

1960年から1975年にかけてのベトナム戦争の時、米国の従軍記者が同行した。彼らはベトナム戦争の過酷で非情な実態を報道した。ベトナム人への無法な虐殺、多くの米軍兵士の戦死報道が反戦運動を、米国を始めとして、世界に広げたことは事実である。

1970年代、韓国の軍事政権下、T・K生の『韓国からの通信』が岩波の『世界』に連載され、軍事政権に抵抗し、自由と民主主義を求める民衆の命を賭した運動が報道された。軍事政権の横暴が世界に発信され、多くの人に知られ、民主化を進める大きな働きとなった。私はこの通信に、生きるとは何かを教えられ、本当に励まされてきた。農村伝道神学校で、受講していた時、韓国人の池明観先生に「韓国政府はT・K生を血まなこになって探索しているでしょうね」と言ったら、池先生はにこにこしておられた。後になって、T・K生は池先生ご自身であることを知って驚いた。1980年、一人のドイツ人記者が市井のタクシー運転手に頼み込んで、光州に乗り込み、民主化を求める学生・市民の運動を強烈に弾圧する「光州事件」の非道さをカメラに収め、写真を世界に発信した。この情報も韓国の民主化に大きく貢献した。「タクシー運転手」として映画化された。

現在、中国は、ウイグル族を同化しようと、著しい人権侵害を行っていると言われているが、その実態は解明されていない。中国はひたすら隠蔽しているようだ。香港は、一国二制度を認められ、中国と違い、自由と民主主義が保障されていた。ところが、中国政府は、香港を「国家安全法」の下に置き換え、強権国家の支配下に置いた。言葉を奪い、中国政府の言うことを聞かない者たちを徹底的に弾圧するようになった。民主化を求める人々は、粉々に粉碎され、その支配は残酷という他ない。

岩波の『世界』の7月号から『香港からの通信』が連載されることになった。第1回は「国安法に踏みこまれた報道の自由 独裁へのさらなる一歩」と題する、ペンネーム林寒盡氏の報道である。『世界』は、「本連載では、香港で何が起きているかを、現地から第一線の筆記者がレポートしていく」と紹介している。明らかに『韓国からの通信』からタイトルと精神を引き継ぐもので、中国の強権支配に対する市民的抵抗を示し、世界への連帯を訴えるレポートである。香港人の置かれた苦悩を詳しく知りたいと期待している。

第1回は、メディアの問題を中心に報道されている。主要なメディアであった『蘋果日報』は閉鎖させられ、『立場新聞』は運営停止に追い込まれ、『衆新聞』は自主的に解散した。民主化を求めるメディアは次々と消され、消されたメディアから1000人に及ぶ失業者が出て、彼らが報道業界に腰を据えるのは不可能に近い。扇動罪で逮捕される人もおり、海外に転出した人も多い。外国の記者がビザを取り消されたり、空港で拘束され、入国を禁止されることもある。外国企業も香港からの撤退の検討を進めている。中国政府は香港の経済的貢献を重視していないらしい。香港の情報は著しく偏り、外の世界との相互のコミュニケーションも徐々に隔絶され、鉄のカーテンが降ろされつつある。しかし、政治的に迫害され、失業しても香港を離れない報道記者や編集者もいる。彼らが今後『香港からの通信』を書いてくれるのであろう。林氏は最後に、「私たちは必ずやこの隔絶を打破しなければならない。前世紀の冷戦時代に西側が用いた方法が、もしかしたらその第一歩となる示唆を与えてくれるのではないかと締めくくっている。